

日本学生観光連盟
平成 24 年度事業報告書



2013 年 3 月 17 日
日本学生観光連盟 第 4 期執行部

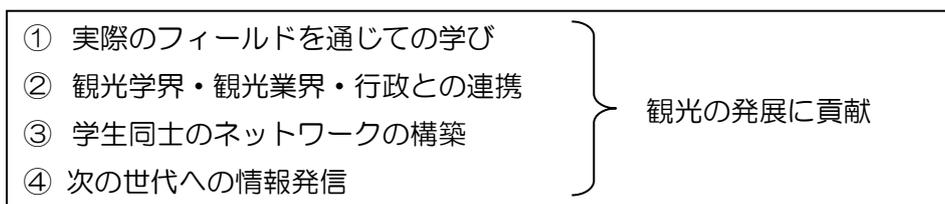
目次

I	連盟概要	
1.	設立理念、組織図・構成	2
2.	執行部・加盟団体名簿	3
3.	サポーター・プロジェクトパートナー	4
II	事業全体の評価	
1.	活動全体の評価	
(1)	平成 24 年度実施事業一覧	5
(2)	設立理念	6
2.	決算報告	9
3.	組織体制についての検証	
(1)	執行部体制	10
(2)	評議員制度	16
(3)	役員選出制度	16
(4)	所属団体との連携体制	18
(5)	サポーター・プロジェクトパートナーとの連携体制	21
III	個々の取り組みの検証	
1.	平成 24 年度事業報告	22
2.	参加者数の状況	
(1)	参加者数	29
(2)	参加者数の傾向	29
(3)	参加者内訳	30
3.	参加者に対する案内・受け入れ体制	
(1)	案内体制	33
(2)	受け入れ体制	33
4.	広報・宣伝の取組について	
(1)	広報印刷物	34
(2)	公式サイト	36
(3)	各種広報活動	36
(4)	企画発表会・各種 PR イベント	36
(5)	メディア掲載記録	36
IV	総括	
1.	執行部総括	37
2.	顧問からの事業評価	38

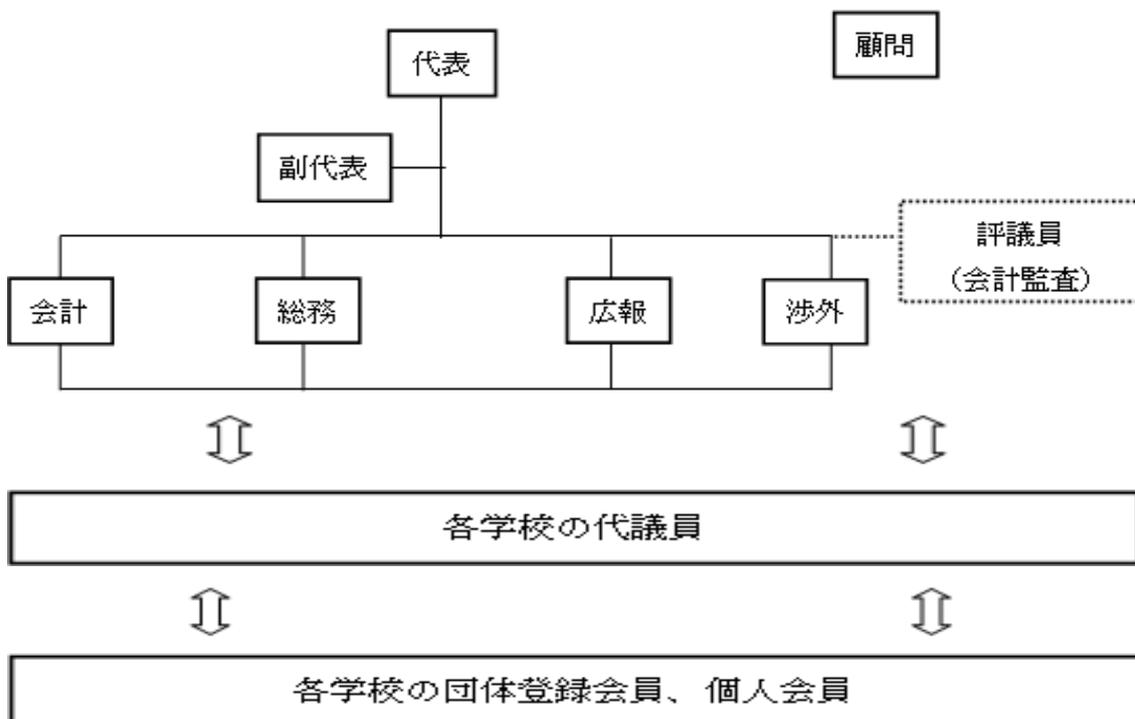
I 連盟概要

1. 設立理念、組織図・構成

日本学生観光連盟（略称:学観連 英語表記:Japan Student Tourism Association）は、観光を学ぶ学生同士がネットワークを構築し、実社会の観光場面で学習活動並びに社会貢献を行うことを通して、観光の新たな可能性を求めることを目的に設立された学生組織である。学生が自主的に活動し、学生の活力と柔軟なアイデアから新たな観光の可能性を切り開き、実社会の観光場面で貢献できるような活動を行っていききたい。



本連盟は平成 21 年 6 月 20 日、立教大学、横浜商科大学、桜美林大学、川村学園女子大学の 4 大学により設立された団体である。現在 13 名の執行部役員が運営を担う。執行部は役員、評議員、顧問から構成される。会員数は 477 名、21 大学の団体が所属している（平成 25 年 1 月 10 日現在）。



2. 執行部・加盟団体名簿

(1)第4期執行部

代 表：藤野 里帆(立教大学/3年) 評議員：高橋 竜(帝京大学/4年)
 副代表：遠藤 優弥(東海大学/3年) 桐山 智光(立教大学/4年)
 林 日奈子(桜美林大学/2年) 船生 朋恵(川村学園女子大学/4年)
 会 計：加藤 友里(帝京大学/3年) 常住 麻衣(桜美林大学/4年)
 会計監査：三堀 世奈(東海大学/3年) 大内 亜津美(文教大学/4年)
 総 務：金野 奈緒子(文教大学/3年)
 川崎 理美(横浜商科大学/2年) 顧 問：鈴木 勝教授(桜美林大学)
 富樫 沙貴(立教大学/2年) 宍戸 学准教授(横浜商科大学)
 広 報：岩崎 仙李(帝京大学/3年)
 北田 百合子(横浜商科大学/3年)
 諸角 智亜(立教大学/3年)
 渉 外：徳武 希和子(帝京大学/3年)
 田中 夏帆(跡見学園女子大学/2年)

(2)加盟団体・大学

団体・大学名	代議員	顧問	参加人数
跡見ニューツーリズム研究会 (跡見学園女子大学)	中澤 瑠生	篠原 靖	72名
国際ツーリズム研究会 (桜美林大学)	槻木 あかね	鈴木 勝	25名
ツーリズム&ホスピタリティ研究会 (川村学園女子大学)	船生 朋恵	丹治 朋子	4名
観光ビジネスコース (共栄大学)	丸子 玲於奈	加藤 彰	10名
木崎ゼミ (杏林大学)	渡邊 裕士	木崎 栄司	36名
すた☆とら (淑徳大学)	小宮 麻衣	白寄 まゆみ	14名
観光研究会 (高崎経済大学)	平野 優太	味水 佑毅	34名
岩下ゼミ (高崎商科大学)	和泉 志歩	岩下 千恵子	20名

ツーリズム研究部 (玉川大学)	五味 朋之	香取 幸一	5名
REISE (帝京大学)	井戸端 舞	柵木 鬼美夫	28名
T-wave (東海大学)	鈴木 里歩	舘野 和子	29名
TSU 観光文化 (東京成徳大学)	鈴木 達郎	臺 純子	5名
学生団体 TIC (新潟国際情報大学)	石井 太一郎		6名
観光研究会-avion- (文教大学)	星田 翔子	山口 一美	71名
白田ゼミ (明海大学)	山田 賢吾	白田 眞一	17名
ホスピタリティ研究会 (横浜商科大学)	熊野 勇司	宍戸 学	27名
流通経済大学	田谷 光弘	幸田 麻里子	2名
TRANSIT (立教大学)	小林 瑞希	渡辺 厚	66名

※敬称略、大学名 50 音順

個人会員：昭和女子大学、日本大学、早稲田大学 1 (2名)

計 21 大学

全体会員数：477名 (平成 25 年度 1 月 10 日現在)

3. サポーター・プロジェクトパートナー

●サポーター

- ・一般社団法人 日本旅行業協会 (JATA)
- ・社団法人 日本観光振興協会
- ・国際機関 日本アセアンセンター
- ・在日外国観光局協議会 (ANTOR-JAPAN)
- ・全国旅館ホテル生活衛生同業組合連合会青年部 (全旅連)

●プロジェクトパートナー

- ・(株)JTB コーポレートセールス

II 事業全体の評価

1. 活動全体の評価

(1)平成 24 年度実施事業一覧 (共催を含む)

開催日時	内容	備考
平成 24 年 4 月 22 日	第 1 回学観連集会	協力：(株)JTB 法人東京※
5 月～10 月	旅を基軸としたビジネスプランの企画研究	協力：(株)JTB 法人東京
6 月 10 日	設立 3 周年記念交流イベント	協力：日本航空(株)
8 月 8 日・9 日	川崎フィールドワーク	後援：川崎産業観光振興協議会
8 月 20 日～24 日	第 2 回若旦那・若女将密着体験プロジェクト (旅館でのインターン事業)	共催：全国旅館ホテル生活衛生同業組合連合会青年部
10 月 12 日・13 日	メコン地域から来日した学生との交流会・意見交換会	主催：国際機関 日本アセアンセンター
11 月 24 日	講演会 2012 「先輩・若手社員に学ぶ、 ここが聞きたい“観光業！”」	後援：(社)日本観光振興協会、東海大学観光学部 講演協力： 東武鉄道(株) 成田国際空港(株) フォーシーズンズホテル椿山荘東京(現・ホテル椿山荘東京)
平成 25 年 2 月 5 日	第 9 回 産学連携オープンセミナー in 東京	主催：(社)日本観光振興協会
3 月 17 日	平成 24 年度総会	

※現・(株)JTB コーポレートセールス

(2)設立理念

学観連の4つの設立理念に対し、今年度どのような取り組みが行われていたかを検証する。

①実際のフィールドを通じての学び

【取り組み】

- ・ 設立3周年記念交流イベント
- ・ 川崎フィールドワーク
- ・ 第2回若旦那・若女将密着体験プロジェクト

設立3周年記念交流イベントでは、単なる会員交流の場に留めず、「学び」の要素を入れるため、JALの機体整備工場を見学した。また総会時に「ニューツーリズム」について討論したことから、それを実際に体験し、学ぶために、川崎市で新たな観光資源として注目される「産業観光」をテーマにフィールドワークを行った。第2回若旦那・若女将密着体験プロジェクトでは、旅館での5日間のインターンシップを通して宿泊産業の現場を体験した。

【評価】

- ・ どの取り組みにおいても、実際にその場で働く人の話を聴く機会を設けている。フィールドに出たからこそ知り、学ぶ機会を多く提供できた。
- ・ 学生が参加しやすい日程・場所を考慮しつつも、設定したテーマをきちんと学べるように調整した。(例えばフィールドワークでは、本物の「産業観光」に触れるため、工場の稼働している平日に実施するなど。)
- ・ イベント・プロジェクトの実施に際し、討論会や宿泊プラン作成とその発表をセットにすることを心がけた。単に企画を楽しむだけでなく、体験から感じたことを参加者同士で意見交換し、アウトプットまで行ってこそ意義のある活動になる。

【今後の課題】

- ・ 参加者数の増加
→より多くの学生と意見交換することで、相互啓発し、新たな発想を生み出す。
- ・ 事前学習の促進
→地域や業界に学生ならではの視点で意見を述べられるようにするため、現地での活動の前に基本的な知識はつけておくよう促す(またはそういった場を提供する)。
- ・ イベント型からプロジェクト型の企画へ
現状学観連のフィールドワークは、参加者の事前学習が不十分なまま、討論会当日その場で意見を述べる「イベント型」になってしまっている。実施目的を、観光地等に対する何らかの提案とするならば、中長期的な「プロジェクト型」としてより具体的・現実的な意見提案ができるように企画すべきである。

②観光学界・観光業界・行政との連携

【取り組み】

- ・ 観光庁主催「第三回若者旅行振興研究会」(平成24年6月6日)に学観連評議員が出席
- ・ (社)日本観光振興協会主催「第9回産学連携オープンセミナーin東京」共催

【評価】

「第三回若者旅行振興研究会」では、民間企業・行政・観光関係団体の方々が出席している中、観光を学ぶ学生を代表して学観連評議員が出席している。また「第9回産学連携オープンセミナーin 東京」では、共催者として企画段階から学観連役員が参加し、基調講演やパネルディスカッションのテーマ決め等、セミナーの構成を担当した。業界人が伝えたいことと、学生が知りたいことをつなぐ架け橋となったのではないかと考える。

【今後の課題】

・会員の運営参加

→上記した取り組みの運営には、評議員や役員など少数の学生しか参加できていない。

→今後は会員も参加できるような仕組みを作る必要がある。

・行政との連携案検討

→現状は勉強会への参加に留まっている。タイアップできないか考えていくことも重要。

③学生同士のネットワークの構築

【取り組み】

・設立3周年記念交流イベント

・川崎フィールドワーク

・メコン地域から来日した学生との交流・意見交換会

【評価】

今年度は、イベント等の際に会員どうしが交流できる機会を多く設けた。その結果、各事業の参加人数増加の効果の効果が表れた。しかし、団体の規模に対して実質参加率は依然低迷している。参加する会員も毎回固定されており、本連盟に加入しているが未だ一度も参加したことがない会員も少なくない。こういった未参加者を誘引できなかったことが今年度の反省である。

【今後の課題】

まずは団体規模に見合う参加率に上げることが課題。今後はさらに交流イベントを増やし、参加するきっかけを作っていく。また、会員に本連盟の活動をより理解してもらうためにも情報発信を活発に行い、各大学に訪問し、団体と執行部の連携を深めていく。

④次の世代への情報発信

【取り組み】

ウェブサイト、SNS（Facebook、twitter）を利用して情報発信を行った。また、観光経済新聞に採り上げていただいたり、第2回若旦那・若女将密着体験プロジェクトの一環であるNHK-BS『地球アゴラ』の番組出演、第9回産学連携オープンセミナーの共催を行ったりと多方面のメディア活動に取り組んだ。

【評価】

様々な媒体を活用して情報発信を行った結果、昨年度に比べて本連盟の知名度が上がった。SNSのフォロワー数も日々増え続けている。知名度が上がったことで、本連盟の

新規会員数も増え、今後のイベント・プロジェクト参加人数増加に期待できる。

【今後の課題】

肝心の観光系学生の間で認知度が低いため、未加入の観光系大学にも本連盟の活動を周知する必要がある。さらに、HP・SNSの発信内容の向上、新入生対象の説明会等を行いたい。また、観光学に興味のある高校生にも情報を発信する仕組みを構築することも検討したい。

2. 決算報告

平成 24 年度 一般会計決算

自 平成 24 年 4 月 1 日
至 平成 25 年 3 月 17 日

1) 会計報告

【収入の部】

(単位:円)

科目	予算額	決算額	差異	摘要
入会費	3,000	82,200	△ 79,200	300 円×274 名
非会員イベント参加費	0	8,700	△ 8,700	300 円×29 名
受取利子	0	45	△ 45	
当期収入合計	3,000	90,945	△ 87,945	
前年度繰越金	173,853	173,853	0	
総計	176,853	264,798	△ 87,945	

【支出の部】

(単位:円)

科目	予算額	決算額	差異	摘要	
事業費	総会	0	2,544	△ 2,544	菓子折り、お茶
	第 1 回学親連集会	0	9,400	△ 9,400	会場費、菓子折り
	全旅連インターンシップ	0	10,181	△ 10,181	菓子折り、お茶、郵送費
	川崎フィールドワーク	0	7,116	△ 7,116	バス代、菓子折り、文具、コピー代
	講演会	35,000	12,642	22,358	菓子折り、お茶、懇親会補助費、郵送費
事業予備費	予備費	126,853	0	126,853	
小計		161,853	41,883	119,970	
運営管理費	HP 管理費	0	3,105	△ 3,105	サーバー使用料、手数料
	会場費	0	5,400	△ 5,400	代議員会の会場費
	消耗品費	10,000	3,751	6,249	代議員会の懇親会
	郵送費	5,000	0	5,000	
小計		15,000	12,256	2,744	
当期支出合計		176,853	54,139	122,714	
当期収支差額		0	210,659	△ 210,659	
次年度繰越金		0	209,559	△ 209,559	

平成 24 年度における決算につきまして、上記の通り報告致します。

作成日時:平成 25 年 3 月 16 日(火)

会計 加藤 友里

2) 監査報告

上記会計報告につき監査し、内容に間違いの無いことを報告致します。

監査日時:平成 25 年 3 月 16 日(火)

会計監査 三堀 世奈

3. 組織体制についての検証

(1) 執行部体制

1.1 役員会の運営状況と課題

第4期役員は、月2回のペースで役員会を行ってきた。実施回数は全23回にのぼる。学観連の運営は今のところ全てこの場で行っているため、内容は総会・講演会・交流会等各種イベントの企画立案、実施プロジェクトの状況報告、組織体制の課題発見と対処検討など多岐に渡った。代表が進行を行い、毎回役員10名前後での会議であった。



役員会の様子（横浜商科大学にて）

役員会運営の反省・課題点を以下に挙げる。

- 対応の迅速化、「報・連・相」の徹底
 - 登録団体・外部団体からの問い合わせに対する対応や、事業後の報告書作成が大幅に遅れることが何度かあった。役員それぞれが自覚をもち、すべてを指示されなくても動けるようになること。
- 会議運営における事前の詳細な議題提示
 - 大まかな議題は事前に連絡していたが、十分でなかった。考えを整理してから出席できるよう、事前に詳細な議題を提示すべき。
- 運営状況の情報発信
 - 会員からは、役員がどんな活動をしているかイメージしづらい。これから役員に立候補する1~2年生へ向けて、普段の運営の様子を発信していく必要がある。

1.2 各役職の状況と課題 ※広報についてはP.36に掲載

①総務の状況

➤ 総務内の連携

- 成果**・担当月を決めたことで、各自が責任を持って取り組めた。
 - ・代議員の変更や新規入会、企業からの問い合わせなど、情報共有を意識して行ったため、組織全体の現状把握をしっかりとできた。
- 課題**・担当を一人一か月としたことで、各自の負担が増えた。
 - ・メール対応に個人差が出てしまった。

➤ 各部署との連携

- 成果**・入会金やイベント参加費の回収では、会計との連携をとれた。
- 課題**・宣伝方法等において、各部署（特に広報）との仕事のすみ分けが出来なかった。
 - ・会員数・参加団体の変更があるたびに情報提供をしなかった。（関係団体・企業に何う代表や渉外には変更ごとに現状報告をすべきだった）

➤ 会員との連携

成果 (代)・各所属団体へのメーリス転送完了の旨を報告してもらうようお願いしたため、どの団体に情報がまわっているのか、いないのかが明確になった。

課題 (代)・メーリス転送完了の報告が途中で減少し始めたが、特に対処しなかった。
・月をまたいでメール対応の際、手続きの途中で担当者が変わることがあり混乱を招いた。

(個)・入会はしたものの、一度も活動に参加しない個人会員が多く、最後まで把握を出来なかった。

(代・個)・今後、会員数がさらに増えることが想定される中で、情報発信の仕方（メーリスの利用等）や所属団体との関係性の構築を含め見直しの必要がある。

・入会手続きをより簡潔なものにすべき。

➤ 名簿管理

成果・各団体の参加状況や傾向をデータ化し、役員同士で共有することが出来た。

課題・過去の入会金未払いをなくすことが出来なかった。

・イベント時に非会員が参加費を支払わないケースがあった。全体名簿との照合作業をすべきだった。

② 渉外の状況

➤ 渉外内の連携について

課題 今年度まで渉外は 2 人であったため、企業等へ訪問する際の日程調整をできないことが多々あった。

→来年度は渉外の人数を増員したため、改善される見込み。

➤ 仕事内容について

課題 渉外の明確な仕事内容がない。

→企業訪問だけでなく、新歓時期に各大学へ赴いて学観連の PR を行うなど、会員へのアプローチも積極的に行うべき。

➤ 各部署との連携

成果 渉外内で日程調整がきかない場合でも、副代表との連携がうまくとれた。

課題 (広報) Facebook への問い合わせ対応

→広報が対応にあたり、実際に会うことになった場合渉外に対応を引き継ぐが、この連携がうまくいかなかった。

(総務) 会員数、参加団体の確認

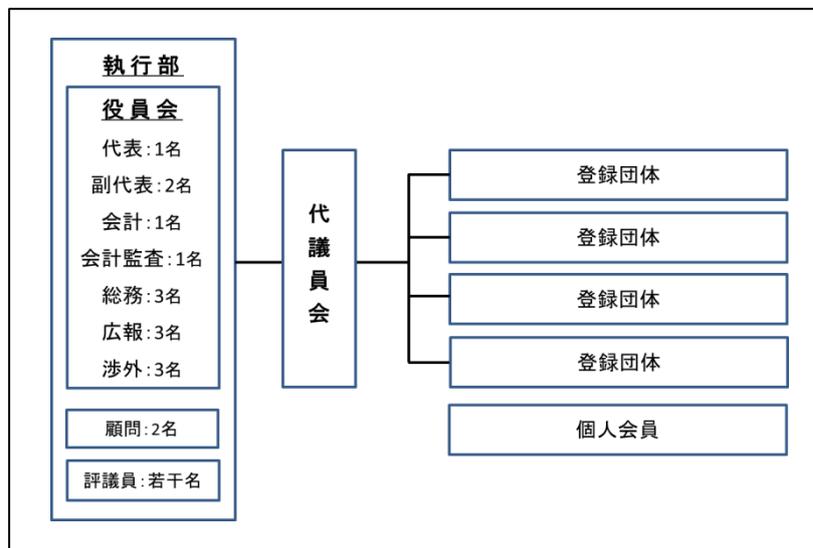
→外部団体訪問の際、現段階での会員数や参加団体の確認を随時すべきだった。

1.3 組織改編提案

・現状の組織体制の課題

学観連は今年度第4期目を迎えたが、組織体制は設立時と変わらず、毎年役員10数名で運営を行っている。しかし、団体の規模が大きくなるにつれて、現在の組織体制の見直す必要が出てきており、組織改編に向けて役員会・代議員会で話し合いを重ねてきた。

以下は、11月の規約改正前の組織図である。



運営はすべて13名の役員だけで行っており、他450名以上の会員は（極端に言えば）役員が企画したイベントに参加するのみだ。会員にとっては、都合の付くときにイベントに参加できたり、サポーター等から集約された情報（イベント案内、アルバイトスタッフ募集等）を得られたりするため、所属しているだけでもメリットはある。しかし、執行部としては以下の二つの理由から見直しの必要があると考えている。

a) 運営に関わる人員の不足

代議員会でのヒアリングやイベント時のアンケートでは、「もっと気軽に参加できるイベントを増やしてほしい」という要望が多く寄せられたが、現状の役員数では2~3カ月に1度イベント等を実施するのが精一杯であった。一つ一つの活動の質を上げることももちろん重要だが、そもそもの活動頻度が少ないと会員同士の接点ができず、リピートにも繋がらない。今年度会員数は450名を超えており、団体規模に見合った活動内容・活動頻度にするためには、運営側の学生も同時に増やしていく必要がある。

b) 役員と会員の経験値の差

学観連の役員になると、イベント・プロジェクトの企画・運営を繰り返し経験する。また、サポーター団体や支援企業の方々と打ち合わせをすることも多く、学生のうちから様々な職種の社会人と接する機会がある。そういった経験を通して、机上では身につかない対話力や社会常識、組織論を自然と学ぶことができる。

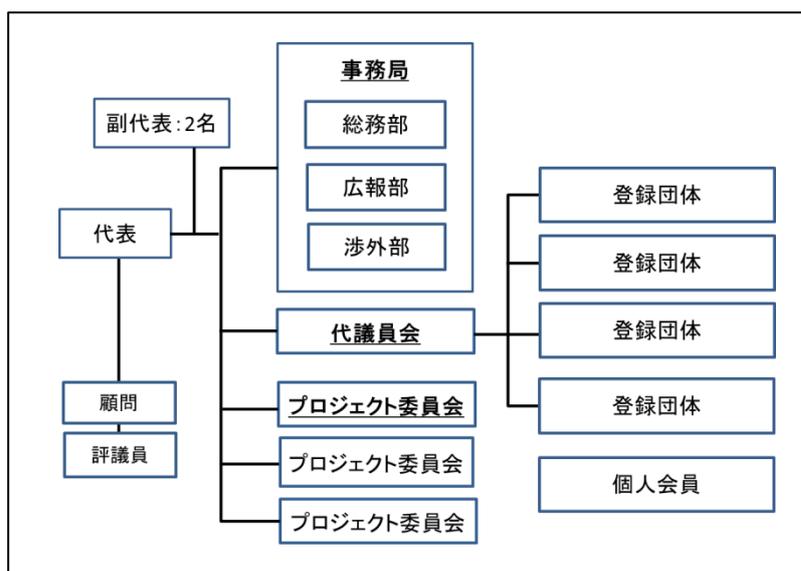
しかし、役員となった10数名の学生だけがそのような経験を積む一方、会員のうちは実際の企画・運営のプロセスに携わることはできない。

学観連は、大学のカリキュラム外で、学生が主体的に学び・経験し・成長する“場”の創造を目的の一つとして設立された組織だ。今後は、現状役員のみが得ている経験を、より多くの会員が享受できるようにすべきである。そのためには、役員以外の学生も運営メンバーやプロジェクトメンバーとして活動できるよう、役員だけが運営に関わるという構図を変える必要がある。

・課題に対する解決案

① 役員会での議論

改編を具体化するために、まず以下の案を役員会にて提案した。



総務・広報・渉外の役職はそれぞれ「部」として独立させ、3つを合わせて「事務局」と呼ぶ。業務的な管理・運営はこの事務局で請け負う。それに対して、各種イベント・プロジェクト等はその都度「プロジェクト委員会」を設置し、専門的に企画・運営を行う。これまで代議員との連携が不十分だったことから、代議員にはこれらのうちどこかに任意で所属してもらうことを想定した。

要は「役員」と「会員（代議員を含む）」という二構造しかない、役員にならないと他の運営に携わる機会がないため、今より規模の大きい事務局や定員の規定がないプロジェクト委員会を作り、そこに会員にも所属してもらおうということだ。

また「役員会」ですべてを管理しようとする、役員が管理できる事業量に限られてしまう。ある程度組織が大きくなれば、部署や委員会それぞれの動きが出てくるのは当然だ。役員がすべてを統括するという考えにとらわれず、柔軟に変えていく必要がある。

詳細部分（全体で集まる機会をどのように設けるのか、各部署間の連絡体系をどうするのか等）は時間をかけて詰める必要があったが、まずは問題提起のきっかけとしてこの案を提示した。

② 代議員会での議論

前項の案について、6月の今年度第1回代議員会にて、代議員から各団体の視点で意見を述べてもらった。結果挙げた意見は概ね以下の通りだ（同様の意見は集約）。

➤ 改編に好意的な意見

- ・事務局やプロジェクト委員会といった参加の場を広めることは賛成。
- ・(運営に) 参加することで盛り上げていきたい。
- ・役員になりたい積極的な学生も多いと思う。
- ・意識の高い1・2年生もいるので声をかければ運営側で参加したい人もいると思う。

➤ 改編に慎重な意見

- ・代議員との兼務は負担がかかりすぎる。
- ・(運営メンバーになると) 交通費、時間がかかる。
- ・大学が千葉県にあるため、都内で集まるとなると遠いので参加する人は少ない。
- ・1・2年生とキャンパスが異なるため、勧誘が難しい。役員に興味があっても、直接声をかけないと参加するまでには至らないと思う。
- ・そもそも学観連のことを知らない人が多い。そのため、運営側になろうとまで思わない。
- ・先輩から学観連のマイナスイメージを受けているため、今募集しても（自身の団体では）集まらないと思う。学観連の説明をきちんとし、参加率を上げてから募集した方が良い。

「運営にも積極的に関わりたい」という声が多数あり、改編すること自体には賛成意見がほとんどであった。一方で、全体的に参加率の低い状況の中いきなり事務局員やプロジェクト委員を募集しても集まらないのでは、という意見も多く聞かれた。大幅な改編に向けては、気軽に参加できるイベントや、入会時等のきちんとした団体説明の機会を増やしていくことが前提となる。

代議員が事務局やプロジェクト委員会に所属する案についても意見を集めたところ、現在の代議員は登録団体の代表を兼ねている学生や、すでに学内でのゼミ活動等で多忙な学生が多く、その上それらに所属することは難しいという声が多かった。執行部としては今後代議員にも運営に参加してほしいと考えている。登録団体の代表と代議員はできれば分けて頂くことが望ましい。

改編案自体には概ね賛成が得られたため、今後組織改編に向けて具体的に話を進めていく、という結論に落ち着いた。

③ 第5期執行部役員募集

代議員からの指摘の通り、参加率の低い状況の中、組織の形だけ変えたところで効果はない。当初は運営メンバーを一気に数十人規模に増やす案もあったが、見切り発車で改編を急いでも執行部内での統率がとれないだろう。これらの課題を再度役員会で話し合った結果、第4期中にいきなり改編を行うのではなく、まずは少しずつ運営に関わる人数を増やし、今後5期・6期にかけて段階的に組織体制を変えていくのがよい、という結論に至った。

そこで、第5期役員募集では、試験的に総務・広報・渉外の定員を5名まで増やし、合

計の募集定員を最高 19 名とした。

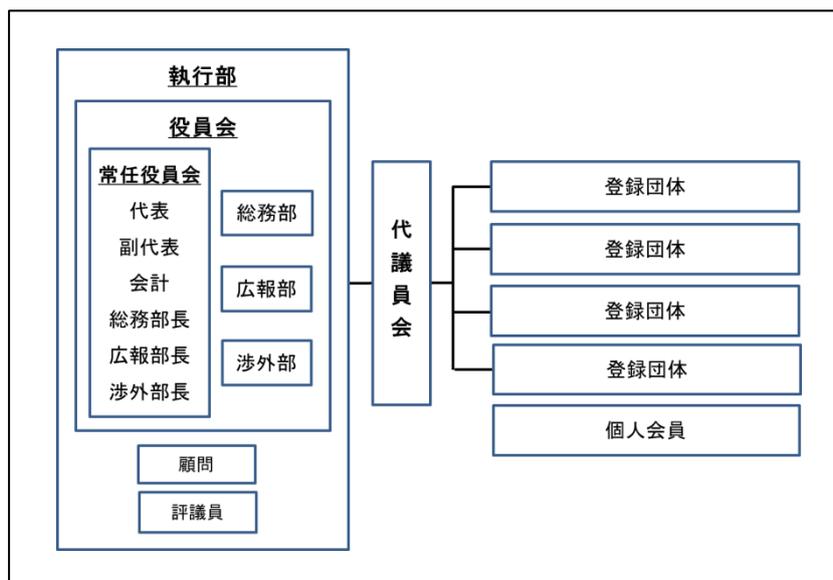
役員定数の変更

役職	改定前定員（第 4 期）	改定後定員（第 5 期）
代表	1 名	1 名
副代表	2 名	2 名
会計	1 名	1 名
会計監査	1 名	評議員に職務を移行
総務	3 名	3 名～5 名
広報	3 名	3 名～5 名
渉外	2 名	3 名～5 名
合計	13 名	13 名～19 名

募集の結果定員を超える立候補があり、選挙によって最高人数の 19 名を第 5 期役員として選出した。

④平成 25 年度の運営体制

運営の中心は現在すでに第 5 期役員にうつっているが、暫定的に以下の組織体制で運営している。



役員会の運営はこれまで通り行っているが、それに加え、新たに「常任役員会」を設置している。ある程度の方向性決めは代表・副代表・会計・各部の部長が出席する「常任役員会」に委ね、役員会はそれ以外の役員や評議員からの意見を取り入れる場としている。これまで役員会場で全てを話し合ってきたが、19 名となると議論をするには人数が多いためだ。ただし、あくまで最終的な意思決定の場は役員会である。

(2) 評議員制度

2.1 評議員の役割

第3期以来、現役員に対するサポート役として前年度の役員から数名選ばれる「評議員」の制度を導入している。評議員は役員会に出席するが、あくまでサポート役であるため、運営の決定権はもたない。役員になりたての時期は、運営の仕方が分からず負担が大きい。新役員の自主性は尊重しつつも、先輩からの積極的な介入と、次年度の方向性を示すことが必要となる。

評議員にはこれまで具体的な職務がなかったが、今年度から12月の代議員会における新役員選出にて、不正防止のため選挙運営を担当することとなった。また次年度からは、これも同様の理由から、これまで役員が担当していた会計監査の役割を評議員に移行することになっている。

2.2 評議員制度の課題

制度導入後の2年間で振り返っての課題を挙げる。

第3期・4期と、評議員は役員からの要望に応じて役員会に出席することとしていた。しかし裏を返せば、役員からの案内がなければ出席もできない（＝運営に一切関われない）ということである。実際、今年度は役員からの案内が必ずしも積極的には行われていなかった。せっかく昨年度からの豊富な経験があるにも関わらず、4年生にとってそれを活かす場がなかったと言える。役員にとっても、客観的な立場から運営に対して指摘する人間がいないことは問題だ。

運営の中心はあくまで2～3年生であるべきだが、言うまでもなく評議員および4年生会員が活動をしてはならないという決まりはない。4年間という限られた学生生活の中で十分に活動に注力してもらうためには、むしろ最高学年になってこそ見えることもあるはずである。評議員含め、就職活動を終えた4年生会員が再び学観連に参加しやすくする仕組みは模索すべきだ。また、前述の通り団体の規模に対して慢性的に運営メンバーが不足している状態である。次年度からは、評議員が現役員の補完的な立場となって、積極的に運営に関わる関係を執行部内に築く必要がある。

(3) 役員選出制度

毎年12月に行う新役員選出のための代議員会にて、役員を選出している。事前に立候補した1～2年生会員に対し、代議員と現役員が信任投票を行う。過半数の得票を得た立候補者が内定し、3月の総会で会員からの承認を受け正式に役員となる。

今年度の役員選挙は、定員を大幅に増やした後初めての実施だったこと、また団体内の推薦過程を省いて行ったことから、選挙制度そのものについての課題が浮かび上がった。運営の全てを任される役員の人選は団体にとって非常に重要であるため、今年度の選挙の反省点は平成25年度の役員改選に向けてしっかりと記録しておきたい。中には当たり前の点もあるが、一学生団体としては組織運営上まだまだ整備されていない部分が多く、今後変えられるところから少しずつ解決していければと思う。

3.1 選挙運営上の反省点

- 立候補者の履歴書提出が必要
 - 役員選出の代議員会では、面識のない立候補者に対してその場の判断で信任投票を行わなければならない。立候補者には志望理由や抱負などをスピーチしてもらうことにしているが、その場の話の上手さだけでは適任かどうか判断しかねる。客観的判断材料として、志望動機や学観連への参加歴等を記載した履歴書の提出は必要。
- 役員の中で選挙管理担当が必要
 - 代議員会当日の選挙運営は評議員が行うが、それ以外の業務は役員の仕事である。募集期間の管理（立候補受付）や代議員会当日の準備（議事次第、座席表・投票用紙作成等の事務的な準備）を専門で受け持つ担当がいればスムーズ。
- 評議員との事前調整が不十分
 - 運営を依頼するにも関わらず、代議員会の日程を役員のみで決めるなど、至らない点があった。次年度役員募集を開始する前に、どこまでを評議員に委託するか等、役員・評議員間で十分に段取りを詰めておかなければならない。

3.2 選挙制度上の反省点

- 選挙を運営する4期役員（3年生）と、次年度も役員に立候補する4期役員（2年生）の線引きが曖昧
 - 立候補者は現役員と立場を分けなければ、新たに立候補する会員と平等でない。
- 自由立候補としたことのメリット・デメリット
 - 定員を増やしたためにどのくらい立候補があるか予測できず、今回は自由立候補とした（本来役員に立候補するためには代議員からの推薦が必要だが、その過程を省いた）。
 - （メリット）本来確実な人選のために、各団体内で代議員が責任をもって役員を推薦することとしていたが、自由立候補としたことで結果的に現役員と知り合いでない1~2年生からもやる気のある学生を数名集めることができた。
 - （デメリット）代議員会当日になって初めて顔を合わせる立候補者も多く、面識のない学生に対して投票するための判断材料がなかった。
 - 推薦制と自由立候補制それぞれのメリット・デメリットを振り返り、今後4期・5期役員間で次年度の募集形態を十分に検討する必要がある。
 - 自由立候補にもメリットはあるが、こちらを採用すると定員を超えた場合信任投票では絞れないため、同時に選挙方法自体を見直す必要がある。

※今回は得票数の多い上位19名を内定とした。ただし、この方法では結果的に再投票・再々投票となる可能性があるため、次回は採用すべきでない。

(4) 所属団体との連携体制

4.1 入会制度の現状と課題

・団体登録制度の意義

学観連への入会は観光関連のゼミ・サークルでの団体登録を基本としている。ここで改めて団体登録の意義について確認しておくが、これは以下の二点を考えての制度である。

①団体の継続性

学観連のイベントは現状2~3か月に一度のペースでしかないため、会員同士が顔を合わせる機会が少ない。その点、各団体内で不定期にでもミーティングが行われていれば、新入生の入会促進や新役員の募集がしやすくなる。会員にとっても、一人で飛び込むより同じゼミやサークルの友人と一緒に参加しやすい。

②観光関連学部・学科生の価値向上

学観連では、観光学を専攻していなくとも興味がある学生にはぜひ学びの場を共有したいと考えており、観光学部・学科生に会員対象を絞っているわけではない。ただし、根本にあるべきはやはり「観光学」であり、組織的に観光の学習活動を行っているゼミ・サークルを中心に構成することで、団体の軸が保たれると考えている。新しい学問領域である観光学部・学科の学生は他学部の学生と比べて必ずしも優位ではなく、そうした状況の改善も学観連の役割である。

・団体登録制度の課題

継続性を考えて今後も団体登録を基本とすることには変わりはないが、一方で解決しなければならない課題はある。以下に4点挙げる。

①各大学の登録団体に所属していなければ学観連を知る機会が少ないこと

学観連としては、観光関連学部・学科に所属する学生に対して、本来積極的に団体の存在を周知していきたいところだ。しかし、現状登録団体以外の学生への直接的なPRはできていない。肝心の観光学部・学科生の間で学観連の認知度が低いのは、単純にこちらから情報発信を行っていない（行える状態に体制が整っていない）からである。

団体のPRを積極的に行っていない理由は二つある。

a) 会員への連絡体系がメルマガのような一斉配信ではないため、個人会員が増えた場合一人一人に対して連絡を送らなければならないこと。

※連絡体系については現在見直しを予定しており、後述する。

b) 面識のない個人会員ばかりが増えると、継続性が疑わしいこと。実際、入会したものの一度も参加しないまま連絡のつかなくなる個人会員はいる。これについては個人会員に問題があるというより、まだまだイベントの頻度自体が少ないために、顔を合わせる機会がないことが原因と考えた方がよい。対策として、入会時に面談を設けるなど、役員が積極的に顔を合わせる機会を作ることを行っている。

②知っていたとしても入会しづらいこと

すでに登録団体のある大学の学生が入会を希望している場合、学観連に入会するためだけにその団体にも所属しなければならない、という状況が発生する。個人で入会することもできるが、前述した通り連絡体系の課題や継続性の問題があり、あまり推奨していない。

学観連と同じように団体登録を基本としている「インカレ」では、同じ地区の個人会員が一定数以上集まれば「支部」を設けられる、という制度を取っているところがある。歴史のある他団体を参考にしながら今後対処方法を検討していく。

③登録団体数が一大学・一団体に留まっていること

現状登録団体は一つの大学につき一団体に留まっているが、今のところそれ以外のゼミ等に対して営業活動は行っていない。しかし、一大学・一団体というルールがあるわけではなく、ネットワークを広げていくにはむしろ一つの大学内に複数の登録団体があってもよい。前述の通り観光学部・学科生間でも団体の認知度が低い状態であるため、既存団体の顧問の先生方と連携しながら、渉外を中心にその他の団体にアプローチすることを考えるべきである。

④各団体によって入会基準が統一されていないこと

登録団体によって、入会の基準が以下の二つに分かれてしまっている。

- a)学観連に登録しているゼミやサークルへ入った際、自動的に学観連に入会することになる団体。例えば立教大学の登録団体「Transit」など。
- b)登録団体への入会に加えて学観連にも入会するかどうかを個人が選択できるようにしている団体。例えば東海大学の登録団体「T-wave」など。

結論から言えば、今後**b**の基準に統一することが望ましい。

aの基準の団体では、極端な話「サークルに入ったつもりが気づいたら学観連の会員になっていた」という状態の学生が少なからず出てくる。団体の規模と比較して活動への参加率が低い原因はここにもある。各団体に入る際、学観連について役員や代議員等からきちんとした説明を受け、組織について十分理解した上で入会するかどうかを選択できるようにすべきである。

4.2 連絡体系の現状と課題

「(1)執行部体制」でも触れているが、学観連の連絡体系はメルマガのような一斉配信ではない。執行部から宣伝や連絡事項がある場合、まず総務が代議員一人一人にメールを送り、メールを受け取った代議員が各団体のメーリスにそれを転送する、という若干手間のかかる方法を取っている。あえて手間をかけているのは、役員と代議員のつながりを保つためである。

設立以来この方法を変えずに来たのだが、やはり連絡が行き渡るまでに時間がかかる上、代議員が機能していない団体に至っては会員へ連絡が届いてすらいらないという状況が発生

している。代議員との連携については別途模索するとして、来年度からはPCアドレス登録のメーリスの導入を予定している。

4.3 代議員会の実施状況

設立から時間が経ち、代議員会は単に役員会で決まったことを報告する場となりつつあったが、本来代議員会は事業内容や組織の課題など様々な問題を検討する重要な会である。団体の窓口である代議員を巻き込んでいくためにも、3か月に1回程度は実施することが望ましい。特に役員がいない団体では、新規入会や役員募集において代議員が頼りになる。メールのやり取りだけでなく、実際に会い情報交換することで、より意志疎通がはかれる。

今年度、代議員会は以下の通り3回行った。

	日時	議題
第一回	6月7日	・川崎フィールドワーク、旅館インターンシップの集客協力依頼 ・11月実施講演会テーマ決め ・組織改編に関する意見交換
第二回	9月29日	・第5期役員募集（募集・選挙方法、協力依頼事項等の説明） ・学観連の活動でしたいこと、すべきことに関する意見交換
第三回	12月15日	・第5期執行部役員選出

組織改編に向けて各団体の意見を聞く必要があったため、主にそれについて議題に挙げた。初対面では意見が出にくいものだが、各代議員から活発な発言があった。

代議員会運営の反省点としては、以下のことが挙げられる。

- 実施の連絡が毎回遅れた。
→年間で実施スケジュールを決めておき、事業計画書に記載するなど早めに公開しておくことが望ましい。
- 詳細な議題を前もって伝えておくべきだった。
→大まかな議題は伝えてあったが、十分ではなかった。活発な意見交換のためには、学観連にどのような課題があり、それに対してどんな意見を聞きたいのかを前もって伝え、考えを整理してから臨んでもらうべきであった。



代議員会の様子

(5) サポーター・プロジェクトパートナーとの連携体制

サポーター・プロジェクトパートナーには活動助言、講演会への講師派遣等で協力頂いており、毎年学観連の総会にもご出席いただく。原則として金銭的なやり取りはない。団体・企業別に、今年度の依頼・協力事項を記す。※それぞれの詳細は活動報告の項に掲載

● サポーター（団体名 50 音順）

①国際機関 日本アセアンセンター

・10月12～13日 メコン地域から来日した学生との交流・意見交換会への参加

②在日外国観光局協議会

・「Let's go 海外」他、イベントスタッフ募集協力

③全国旅館ホテル生活衛生同業組合連合会青年部

・8月20日～24日「第2回若旦那・若女将密着体験プロジェクト」

・「旅館甲子園」集客協力

④(社)日本観光振興協会

・11月24日実施「講演会2012」への講師紹介

・「第9回産学連携オープンセミナーin 東京」共催

⑤(社)日本旅行業協会

・「海外卒業旅行企画コンテスト」周知協力

● プロジェクトパートナー

(株)JTB コーポレートセールス

・「ビジネスプラン企画研究」への指導

・イベント、アルバイトスタッフ募集の周知協力

サポーター・プロジェクトパートナーとの連携事業は、学生にとって産業界と接点を持ち、観光業界を理解する貴重な機会である。規制の多い大学での活動と違い、学観連は一学生団体として小回りの利く立場だ。今後も産学連携の観点から、産業界と学生をつなぐ役割を担っていききたい。

課題としては、団体によって関わり具合に大きく差があるため、団体それぞれの“色”を意識しつつバランスの良い連携をしていくことである。今後更なる共同事業の活発化を目指したい。

Ⅲ 個々の取り組みの検証

1. 平成24年度事業報告

- 旅を基軸としたビジネスプランの企画研究

【期 間】平成24年5月19日～10月6日

【参加人数】8名

【内 容】

以下の3点を目的とし、ビジネスプランの作成を通して学習した。

- ①実社会で必要とされる、ロジカルシンキングやプレゼンテーション能力、マーケティング能力を身に付けること。
- ②現代ビジネスで応用されている分析手法やプロセス、戦略といった大学の講義では得られない知識を得ること。
- ③他大学の学生や学年の異なる学生と目標を共にし、課題解決に向けて協力することで、新たな刺激を得ること。

5月19日に本活動の説明会を行い、㈱JTB 法人東京の方に「旅の無限の可能性」についての講演と、学生事業提案コンテストの趣旨説明をしていただいた。当初は複数チームを結成し、8月に学観連内で報告会を行い、上位のチームが10月に行われるコンテストに出場する予定だった。しかし活動内容のレベルの高さから参加者が8名しか集まらず、自然にコンテスト出場が目標となり学観連の独自色が薄まる結果となった。月に一度の本社ミーティングを軸に、週に一度の学生ミーティングを通して約半年間活動した。

【成果】

参加者こそ少なかったものの、類を見ないほどの支援、そしてマーケティングを学べる場としてもこの活動は有難いものである。活動は半年間に及んだが、それだけに学生にとってやりがいも大きかった。

【課題】

今後は取り組むテーマを易しくし、1、2年生にも参加してもらえるよう、ハードルを下げても一考。



半年間活動したチームの皆さん



コンテスト予選会の様子

プロジェクト担当：諸角智亜、北田百合子

● 設立3周年記念交流イベント

【日時】平成24年6月10日（日）

【参加人数】50名

【協力】日本航空㈱

【内容】

このイベントは、「(a) 学観連設立理念の再確認、(b) 会員のモチベーション向上、(c) 会員と交流を図り、他のプロジェクトやイベントへの参加を促す」ことを目的として企画・実施された。前年度までは食事のみの交流会だったが、今年度は学観連で開催する意義を考え、学習面も考慮したイベントとあわせて行なった。具体的には、8月に開催した“産業観光”をテーマとしたフィールドワークに関連付けての開催である。多くの会員が航空業界に強い関心を持っていることに着目し、日本航空㈱が一般向けに実施している機体整備工場の見学を選定した。

告知方法はその他イベントと同様、代議員を通じてのメールやホームページへの掲載、ブログ等で行った。参加募集方法も同様にグーグルの申し込みフォームを利用したが、他のイベントと異なり、見学者数に制限があったため、上限に達し次第申し込みを締め切った。

プログラム前半は、飛行機の格納庫や整備士が働いている最中の機体整備工場を見学した。その後、入社2年目の若手社員の方から仕事内容や大学時代の過ごし方などについて講演をしていただいた。プログラム後半は懇親会を行い、普段あまり話すことの出来ない他大学の会員と交流し、親睦を深める機会を提供することが出来た。

【成果】

このイベントがきっかけでその後の活動への参加者が増加し、リピーターの出現もみられたため、当初の目的を果たせたのではないかと考える。

【課題】

整備工場内で撮影した写真の掲載制限などもあったが、後日ブログやホームページなどで活動報告を行わなかった。



見学中の様子。実際の制服を着たり、間近で機体を見たりと体験型の見学だった。



講演中の様子。
若手社員の方の話に熱心に耳を傾けていた。

企画担当：川崎理美、三堀世奈

● 川崎フィールドワーク『地域から発信せよ！川崎の観光資源』

【日 時】平成24年8月8日（水）、9日（木）

【場 所】1日目：ソリッドスクエア、味の素(株)川崎事務所、JFE スチール(株)東日本製鉄所、川崎市臨海部周辺

2日目：ソリッドスクエア

【参加人数】1日目：34名 2日目：31名

【後 援】川崎産業観光振興協議会

【内 容】1日目：事前学習講演会

講師：亀山安之 氏（川崎市観光協会 産業観光プロデューサー&ツアーディレクター）

工場見学、工場夜景見学

2日目：学生討論会

川崎市内にある工場を見学したり、地域の人々や生産に携わっている人々の話を聞いたりしながら、新しいタイプの学習型観光の一つである「産業観光」を実体験した。また、企業の地域における役割や、その技術の保全と継承の重要性を理解する機会ともなった。そこで得たものを自分たちなりにまとめ、2日目の討論会にて意見交換を行った。

【成 果】

参加者にアンケートを行ったところ、参加前は川崎に対して「観光」のイメージがなかったが、参加後は工場夜景など魅力的な産業観光の資源を持っていることを知り、「観光都市としての一面に気づくことができた」という意見が挙げられた。また、「今回のフィールドワークが地域活性化について考える機会になった」という回答も得られた。観光を考える上で重要なのは「地域」の存在である。いかに地域が持つ資源を活かし、流行に左右されない観光地にしていくか考えるためのきっかけになった。

【課 題】

活動テーマに対する学生の知識不足。事前学習を行うなどフィールドに出る前に知識を付けておく必要がある。協力して下さる企業や行政の方々に、何らかの形で貢献できるような活動をしていく。



味の素の工場にて



幻想的な工場夜景を見学

企画担当：遠藤優弥、林日奈子、金野奈緒子、川崎理美、富樫沙貴

● 第2回若旦那・若女将密着体験プロジェクト

【実施日】平成24年8月20日～8月25日（4泊5日）

【主催】全国旅館ホテル生活衛生同業組合連合会青年部 夢未来創造委員会、
日本学生観光連盟

【受け入れ施設】・湯沢温泉 越後湯沢 HATAGO 井仙 ・松之山温泉 ひなの宿ちとせ
・湯沢温泉 雪国の宿高半 ・みなかみ温泉 別邸仙寿庵
・みなかみ温泉 蛍雪の宿尚文 計5施設

【参加人数】20名

【内容】

本事業は、旅館業における経営者密着型インターンシップである。

近年、旅館業界において優秀な人材の確保が難しい状況が続いている。インターンシップを通して若い世代にその魅力を感じてもらい、まずは旅館業に対するマイナスイメージを払拭しようと、昨年度より「若旦那・若女将密着体験プロジェクト」と題して共同インターン事業を行っている。学観連としては、「①経営者密着型インターンへの参加を通して、旅館での作業は勿論、宿の理念、地域に密着したおもてなし、地域観光への取り組みを学ぶこと②施設ごとに宿泊プランの作成を行い、旅館の新たな魅力を学生ならではの視点で発見すること」を目的とした。

2回目の実施であった今回は、昨年度浮かび上がった改善点や、より学生の体験希望を反映させたプログラムを構成して頂いた。若旦那・若女将のスケジュールに合わせ、経営者の仕事を間近で見られる内容となった。また今回は、業務体験に加え、「それぞれの宿に合った宿泊プランの作成」という課題をプログラムに組み込んだ。

【成果】

参加者アンケートでは9割の学生が「満足」としており、「来年も参加したい」または「友人に薦めたい」などと回答していた。また、今回「別邸 仙寿庵」にて体験したチームの宿泊プランが「じゃらんネット」の販売にこぎつけた。

【課題】

- ・宿泊プラン作成を配慮し、履歴書の提出を含め男女比や学年比等チーム構成をもう少し考えるべきだった。
- ・実施後、本事業の良さを会員や外部へ十分に発信出来ていなかった。



プロジェクト担当：加藤友里、徳武希和子

● メコン地域から来日した学生との交流会・意見交換会

【日時】平成24年10月12日（金）、13日（土）

【場所】芝パークホテル

【参加人数】1日目：15名 2日目：15名

【主催】国際機関 日本アセアンセンター

【内容】

「ASEAN Youth Exchange Program 2012」の日程のうち、学観連は10月12日（金）、13日（土）両日における講演会とASEAN各国で観光を学ぶ学生との交流・意見交換会を行った。交流・意見交換会には、カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ、ベトナムから5名ずつの計25名と日本学生計15名により行われた。

一日目 日本アセアンセンター観光交流部長代理 淵上様より「日本の文化・伝統について」英語でご講演いただいた。日本の文化・伝統の紹介を英語で聞く貴重な時間となった。また環境省自然環境局の堀上様より、三陸復興や国立公園についてレクチャーしていただき、日本の自然の美しさや素晴らしさを改めて知ることができた。その後、アセアン各国の学生と日本人学生の立食形式の交流会に参加。英語でのコミュニケーションであったが、すぐに打ち解けることができ、参加者は楽しく交流していた。

二日目 日本人のアセアン各国への旅行者の動向について学んだ後、5つのグループ（1グループ:カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ、ベトナムから各国計1名ずつ計5名+日本人学生数名）に分かれ、ワークショップを行った。トピックは「メコン地域へのインバウンドを活性化するには何をすべきか」。日本人学生は各国に対するイメージなどを伝えながら、活発な意見交換会が行われた。最後に討論内容を各グループで模造紙にまとめ、発表を行った。

【成果】

「英語での交流」がハードルになったのか思うように集客はできなかったが、その分意識の高い学生の積極的な参加が見られた。ASEANの学生達が流暢に英語を話す様子には日本人学生も刺激を受けたようだ。

【課題】

学観連として行ったことは集客や当日の日本人学生の取りまとめのみだった。アセア諸国に関する知識も乏しかったため、事前に勉強会を幾度か開くなどの工夫が必要だった。学観連での国際的な行事はないため、機会を活かすべきであった。来年度はこれらを改善した国際交流のイベントを目指したい。



担当：田中夏帆

● 講演会 2012「先輩・若手社員に学ぶ、ここが聞きたい“観光業”！」

【日時】平成 24 年 11 月 24 日（土）

【場所】東海大学代々木キャンパス

【参加者数】76 名（非会員含む）

【後援】(社)日本観光振興協会、東海大学観光学部

【講演協力】東武鉄道(株)、成田国際空港(株)、フォーシーズンズホテル椿山荘東京（現：ホテル椿山荘東京）

【内容】

この講演会は学観連が毎年主催している、観光業界で働く方々を講師として迎える講演会である。4 度目の開催となる今回は、「学生の観光業界への進路」を大きなテーマとして企画した。先輩社員の方・若手社員の方双方の立場から現場の“生の声”をお聞きすることで、参加した学生が観光業界で働く具体的なイメージを膨らませ、観光の学びを発揮できる将来を考える機会を提供できないかと企画した。

それぞれ企業で活躍されている中堅社員・若手社員の方々にご講演いただいた。講演は企業ごとに 3 つの教室に分け、少人数で行った。事業内容や各業界の課題点、あまり知られていない仕事の裏側などをお話し頂いた。パネルディスカッションでは、「先輩社員がホンネを語る！今、学生に伝えたいこと」というテーマのもと、先輩社員の方々3名にご登壇いただいた。講演会終了後は学食にて交流会をセッティングし、講演者の方々と学生との会話の場を設けた。

【成果】

アンケートでは、多くの参加者から好評な意見があがっていた。少人数制であったために講演者の方々と近い距離で話を聞くことができたという声や、興味のある業界の仕事内容、現場の舞台裏など、普段聞けないホンネの話を聞くことができたという声が寄せられた。

【課題】

役員のない団体の学生にも活動の魅力を発信するために、Facebook、Twitter、SNS を利用した周知にも力を入れるべきである。また、参加者募集を開始するタイミングや、一目で魅力が伝わるチラシにも改善する必要がある。



開会式



3会場に分かれての講演



終了後の懇親会

企画担当：全執行部役員

● 第9回 産学連携オープンセミナー

【日時】平成25年2月5日(火)13:30~16:45

【場所】東商ホール

【参加者数】535名（うち学生は87名 大学443名）

【主催】(社)日本観光振興協会

【内容】

(社)日本観光振興協会が毎年開催している、観光業界のトップをお招きして行われるセミナーに、第8回から共催として企画運営に携わっている。観光関係の業界人のみならず、観光業に関心を持つ就活生など、多くの人を集めている。学観連の役割は、観光を学ぶ学生が今学んでいることをリアルタイムでセミナーに反映させ、学生に観光業界への興味を持ってもらい、多くの人に足を運んでもらうセミナーにすることだ。

昨年に引き続き、受付、接遇、舞台管理を学観連スタッフが担当したほか、今年度は新たに司会、学生からの研究発表を役員が担当し、「地域から発信せよ！川崎の産業観光」と題し、8月に行った川崎フィールドワークの発表をさせていただいた。

<基調講演>「新規事業への挑戦～エキナカから地域活性化～」

東日本旅客鉄道(株) 事業創造本部地域活性化部門部長 鎌田由美子氏

<パネルディスカッション>

「ツーリズムイノベーション～21世紀のリーディング産業を目指して～」

(株)i.JTB 代表取締役社長、WILLER ALLIANCE(株)代表取締役社長、

ジェットスター・ジャパン(株)常務執行役員、(株)プリンスホテル執行役員

【成果】

- ・早い段階から打ち合わせを何度も行っていったため、スムーズに準備することができた
- ・前年度より参加者は増え、概ね好評だった
- ・当日は目立ったミスもなく、全員がしっかりと役割を果たせた

【課題】(セミナー当日の運営含む)

- ・学観連の宣伝をさせてもらえるようお願いすべきだった(チラシの配布等)
- ・次年度は学観連からの参加者数を事前に自分達で把握したほうが良い
- ・毎回応募者に対して当日の参加者が減るため、その対策が必要



川崎 FW の実施内容を発表



受付の様子

企画担当：富樫沙貴、徳武希和子、三堀世奈、岩崎仙李

2. 参加者の状況

(1)参加者数

各イベント・プロジェクトの参加者数は以下の通りである。前年も実施しているものについては、そちらの参加者数も記載した。

事業名	前年度参加者数	今年度参加者数
第1回学観連集会		31
ビジネスプラン企画研究	40	8
設立3周年記念交流イベント	52	50 ^{※1}
フィールドワーク	34	34
第2回若旦那・若女将密着体験プロジェクト	6	20 ^{※2}
メコン地域から来日した学生との交流・意見交換会		20
講演会 2012	56	76

※1 参加者数の上限を50人に設定した

※2 参加者数の上限を20人に設定した

(2)参加者数の傾向

上記の企画を以下のように分類した。

- ①事前学習が求められる企画：企画研究、密着体験プロジェクト、フィールドワーク
- ②単発イベント型の企画：交流イベント、講演会
- ③新規企画：集会、メコンの学生との交流会・意見交換会

①に関しては、大幅に減少したものと、大幅に増加したものと、変化がみられないものがある。全体的にばらつきがあり、傾向はつかめない。ただし、実際にフィールドに出て体験するものについては比較的増加している。

聴講を主とする②は、増加傾向にある。また、他の項目と比較して参加者数が多い。

③は、今年度新たに実施したため前年度との比較は出来ない。

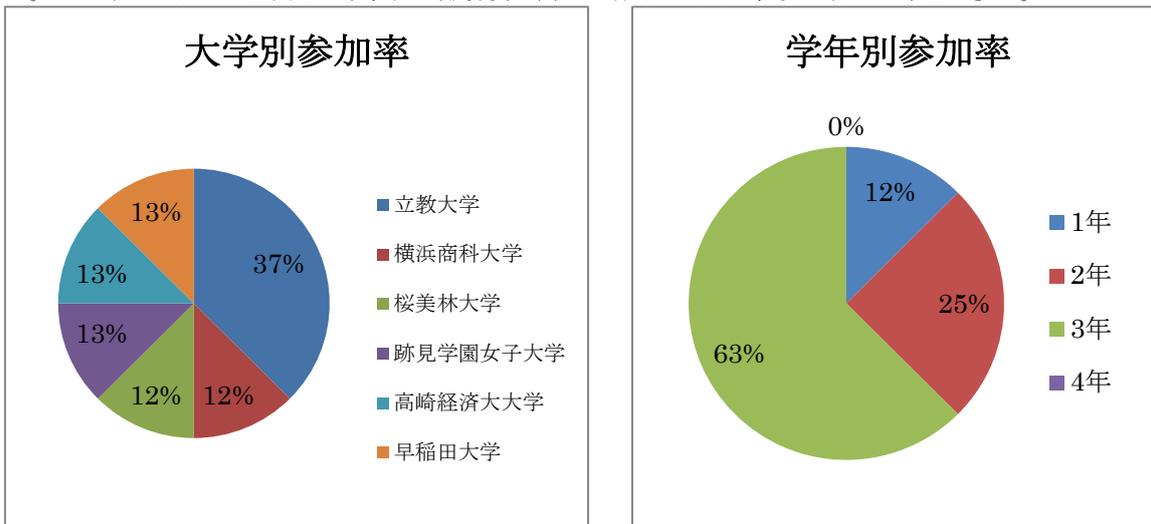
傾向としては、①よりも②の方が参加者は安定して増加している。また、学年別の内訳をみると1・2年生の参加が多くみられ（詳細は以下のa～までに示す）、現行の取り組みでは、すでに参加のしやすいプロジェクトやイベントの企画がある程度充実していると考えられる。多くの会員の参加は、本連盟の魅力や活動そのものを周知する大切な機会であり、参加者数の増加は意義あることである。その一方で、参加者数だけに目を向けるのではなく、より実践的で質の高い企画の充実も求められる。

(3)参加者内訳

各プロジェクト・イベントの、大学別・学年別内訳は以下の通りである。

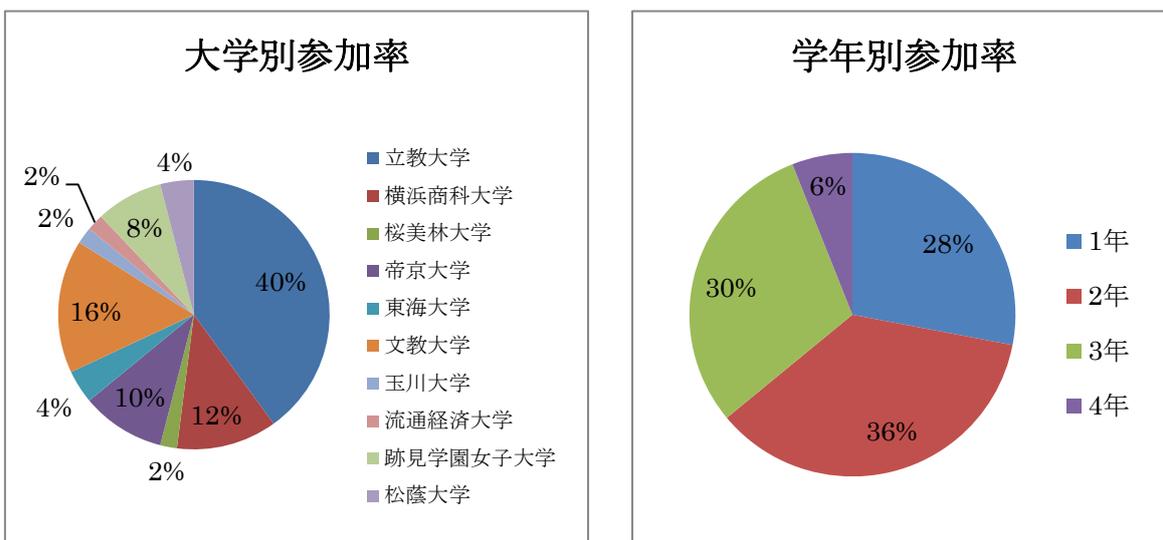
a. 旅を基軸としたビジネスプランの企画研究

5月～10月にかけて実施した「旅を基軸としたビジネスプランの企画研究」の参加者は以下の通りである。ビジネスプランの企画という、少々難易度の高い内容だったため、参加者は3年生が多い。



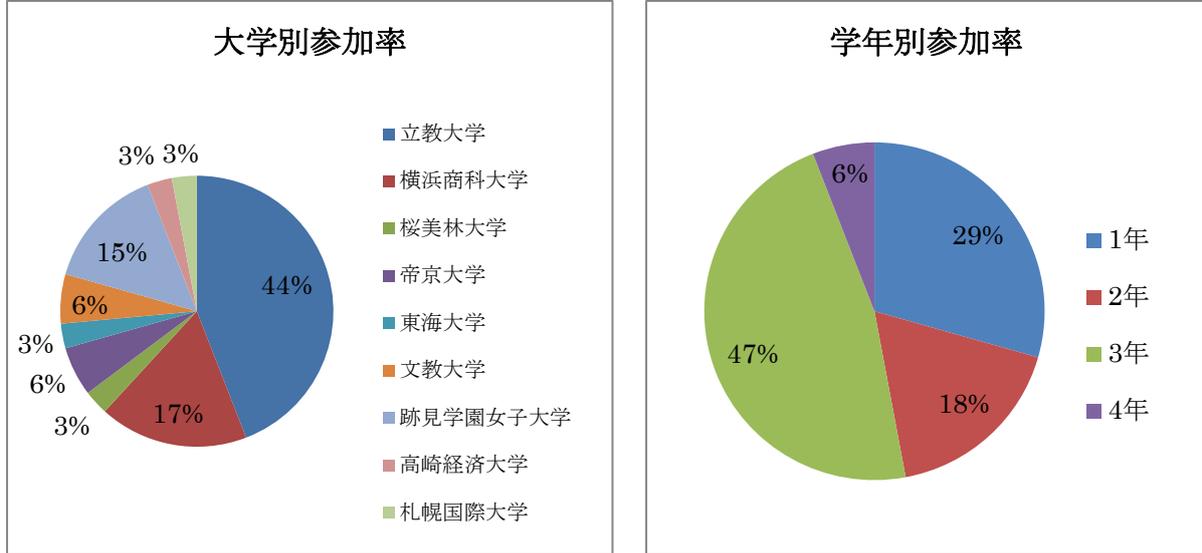
b. 設立3周年記念交流イベント

平成24年6月10日に実施した「設立3周年記念交流イベント」の参加者数は以下の通りである。新規入会した1年生や、今までイベントに参加していなかった層を対象に企画し、狙い通りの効果が得られた。また、所属会員数の多い立教大学や文教大学の占める割合が高い。



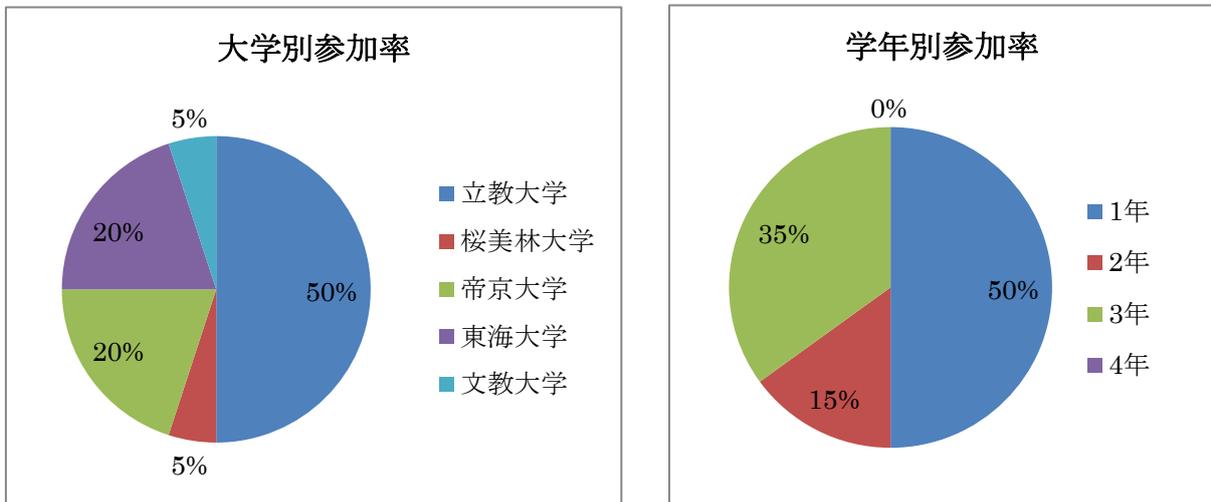
c. 川崎フィールドワーク

平成 24 年 8 月 8 日・9 日に実施した「川崎フィールドワーク」の参加者数は以下の通りである。実施場所の川崎市に隣接する横浜商科大学の参加率が高いが、夏季休暇中ということもあり、遠方の大学からも参加している。



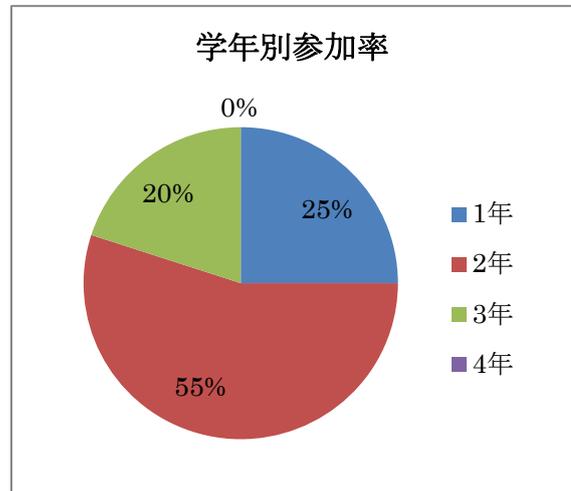
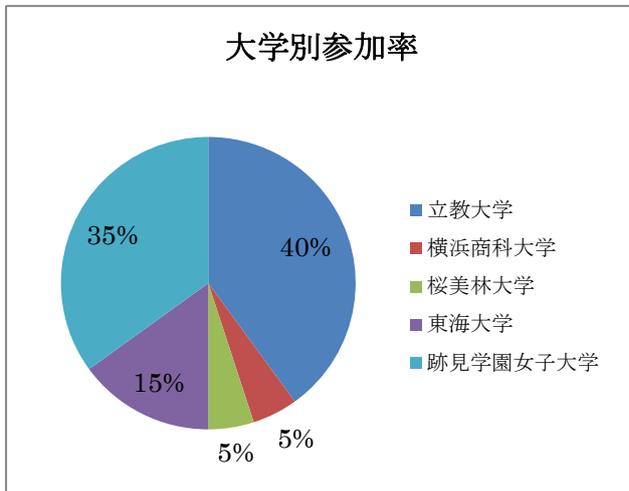
d. 第 2 回若旦那・若女将密着体験プロジェクト

平成 24 年 8 月 20 日～24 日にかけて実施した「第 2 回若旦那・若女将密着体験プロジェクト」の参加者は以下の通りである。インターンシップに参加したことのない 1 年生の参加が目立つ。



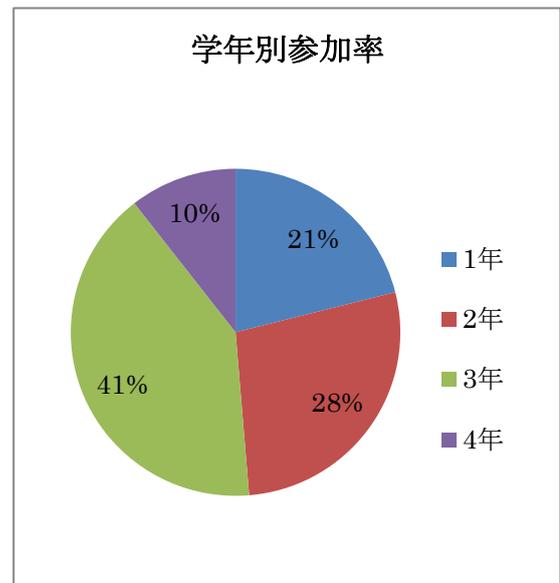
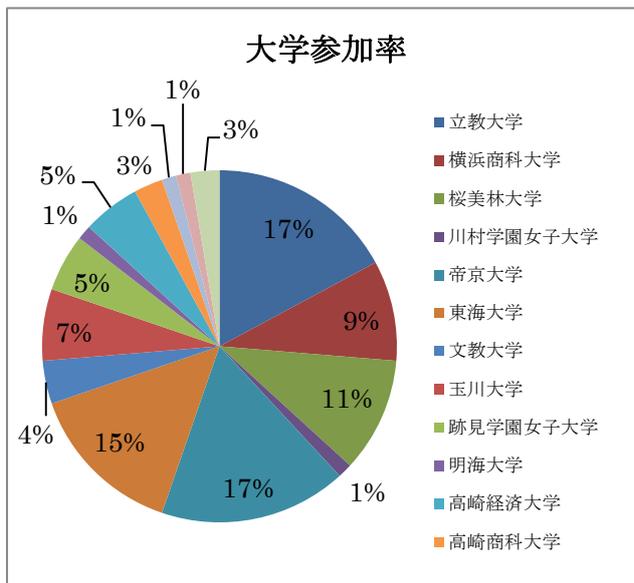
e. メコン地域から来日した学生との交流会・意見交換会

平成 24 年 10 月 12 日・13 日に実施した「メコン地域から来日した学生との交流・意見交換会」の参加者数は以下の通りである。他のイベントと比較し 2 年生の参加率が高く、学年によって興味のある分野が異なることが窺える。



f. 講演会 2012

平成 24 年 11 月 24 日に開催した「講演会 2012」の参加者は以下の通りである。アクセスの良い都心で開催したことにより、大学間のばらつきは見られない。また、就職活動が始まる直前の時期に実施したため、業界を理解しておこうという 3 年生の参加率が高い。



3. 参加者に対する案内・受け入れ体制

(1)案内体制

【現状と課題】総務の主要な仕事である「メール対応」は、ひと月ごとに担当者間で分担し、企業や、他団体、会員からの問い合わせに対応した。中でも代議員に対するメールの送信が最も多く、実際所属する18の団体と、6人の個人会員に対して一通ずつメールを送るのは一定の時間を要する作業であったが、これが代議員と役員間の関係性をつなぐものであったとも感じられる。メールの内容は総務担当者や各プロジェクト・イベント担当者が作成し、それを総務が配信する形であったため、メールの形式（「団体らしさ」といったもの）が統一されなかった。

【改善策】企業の方に対するメールは一般的な形式に従うべきであるが、会員への告知文はもう少し親しみがわく形式を取り入れても良いのではないかと思われる。

(2)受け入れ体制

【現状と課題】団体、個人ともに、学観連のYahoo!メール（通称：学観連アドレス）に届く入会の問い合わせに随時対応している。入会の手続きは、サークル・ゼミ単位での団体入会か、個人入会かを把握することから始まり、団体の代表者である代議員や顧問を立てて書類を作成する、入会金の振込を行う等、入会希望者にとっても煩雑な手続きが多い。さらにこうした一定の期間を要する手続きの間にメール担当者が代わり、状況が把握しにくくなることがしばしばあった。個人での入会希望者に対しては、まず所属する大学にすでに加盟団体がいないかを確認し、加盟団体が存在する場合はその団体への入会を通しての加盟を推奨していた。というのも、個人会員の増加は総務の名簿管理の負担をも増加させるものとなるからだ。次期役員は総務部員も人数が増えたものの、名簿とメール管理に多大な労力をかけるのは好ましくない。「学観連には入りたいが、大学の団体には入りたくない」という人がいる以上、このような状態は改善しなくてはならない。

【改善策】

- ・入会対応に関しては初めに対応にあたった人が最後まで対応する等の解決策が考えられる。
- ・入会をよりスムーズにするために、総務がその都度入会について説明するばかりでなく、一連の手順を示した書類を作成し、名簿のフォーマットと一緒に送付するのも有効

今後も会員数は増加していくことが予想されるため、情報発信の仕方（メーリスの利用等）や所属団体との関係性の再構築について広い視野で検討する必要がある。

4. 広報・宣伝の取組について

(1) 広報印刷物

代議員会にて「チラシを配布したら会員に告知しやすい」という意見が挙げられ、今年度は各種イベント・プロジェクトや次年度役員募集を告知する際にチラシを作成した。チラシはホームページやSNSサイトにも掲載し、会員以外にも閲覧できるようにした。

成果としてはチラシを作成したことにより、会員に分かりやすく告知ができた。また各団体のミーティングにてチラシを配布することができ、より学観連の活動を広めることができたので次年度も継続していきたい。課題としてチラシの作成が遅れてしまい、イベントやプロジェクト告知が遅くなってしまったという点が挙げられる。広報と各イベント担当者との連携を強化することが必要である。

(作成したチラシ)

・ 第1回日本学生観光連盟集会

BWT 共同プロジェクト

説明会&第1回ミーティング

学生ので、“旅のおもしろさ”発信！

第1回日本学生観光連盟集会

日時 平成24年4月22日(日) 14:00～17:00

会場 国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟 501
 最寄駅：参宮線駅(小田急線)または代々木公園駅(地下鉄千代田線)
 会場詳細：<http://nyc.nivee.co.jp/>

参加料 無料

定員数 150名(先着順)

学観連集会プログラム

13:30	受付開始	
14:00～14:15	開会式	
	1. 本日の流れ説明 2. 代表あいさつ 3. 来賓の方のご紹介	新たな旅の魅力・楽しさを 知ってください!!
14:15～15:45	基調講演 株式会社JTB法人東京 事業開発部 部長 久保田達之助様 講演テーマ「旅の無限の可能性」	
15:45～15:55	休憩	
15:55～16:10	学生発表 「震災後における「旅」を基軸とした新ビジネスの立案」	
16:10～16:30	学観連の活動紹介 1. 組織説明 2. 今後の具体的活動 3. 入会案内	
16:30～16:50	JTB 法人東京 学生サポート事業「Dreamer Train」のご紹介	
16:50～17:00	閉会式	

参加申し込み方法

お申し込みURL：<https://sites.google.com/site/gakukanren/>
 上記URLもしくは右記QRコードにアクセスし、必要事項をご記入の上、送信してください。
 申し込み期限：平成24年4月17日(火)18:00

主催：日本学生観光連盟 協力：(株)JTB 法人東京

学観連×BWT 共同プロジェクト 説明会&第1回ミーティング

今年度のBWT共同プロジェクトの説明会&第1回ミーティングをご案内します。

～プロジェクト概要～

JTB 法人東京のご協力のもと、少人数グループで学生目線のビジネスプランを作成します。5月から8月までの約3ヶ月という短期間の活動の中で、「マーケティングの実践・ロジカルシンキング・プレゼンテーション能力」を学ぶことを目的としています。主に2・3年生を対象としていますが、やる気・興味のある1年生も大歓迎です。

～テーマ～

「旅を基軸とした無限の可能性に挑戦」

日時：5月19日(土)
 場所：横浜国立大学 132 教棟
 最寄駅：生麦駅(京急本線) 大口駅(田横線)
 時間：14:00～18:00
 集合：13:30(上記の最寄駅いずれか)
 ●第1部 JTB 法人東京久保田様による講演・プロジェクト説明会
 ●第2部 BWT プロジェクト第1回ミーティング
 久保田様のお話を聞けば、目から鱗が落ちます！またとない貴重な機会です！
 そしてそのお話をヒントに、グループ毎にミーティングをします。
 (グループは当日編成します)

参加対象はプロジェクトへの参加を希望している人としています。
 (説明会に出席できなくても、プロジェクトへの参加は可能です)
 しかし、プロジェクトへの参加自体は当日決めていただけですので、まずは第1部に参加してみてください。
 少しでも興味がある人、迷っている人、是非是非ご参加ください！

～申込み方法～

メール本文に「大学名・学年・氏名・当日の連絡先(携帯番号)、プロジェクトへの参加志向(参加・保留のいずれか)、当日の集合駅、件名に「5/19(説明会)参加希望」とご記入の上、ご本人が「お送り先」までご連絡ください。
 申し込み受付先：(gakukanren_0519@yahoo.co.jp)
 期限：5月12日(土)23:59
 ご質問等も同上のアドレスにて承っています。

・ 設立 3 周年記念交流イベント

学観連 3周年記念イベント



学観連は今年で設立3周年！
これからも大学・学年の枠を超えた
交流をしていきましょう！

学びの場はもちろんですが、
遊びの場も必要ですね！
今年の交流会はJALの工場見学が
ついています”
美しいので、ぜひ来てください！

14:40 東京モノレール「新豊洲駅」集合
15:00~15:30 JAL 機体整備工場見学
普段は入ることの出来ない機庫で、飛行機の日常を見てみ
ませんか？離着陸の姿も味わえます！
17:30~20:00 交流会
みんなで楽しくお話ししよう！
20:00 JR「品川駅」解散

日時：平成 24 年 6 月 10 日(日) 15:00~20:00
場 所：JAL 機体整備工場、南洲屋「天翔」
参加費：2,300 円
募集人数：30 人(※先着順)
申し込み方法：https://sites.google.com/site/gakukaren/2st
申し込み期限：平成 24 年 5 月 20 日(日) 18:00 まで
お問い合わせ：gakukaren@yahoo.co.jp

・ 川崎フィールドワーク

2012 日本学生観光連盟

新たな観光、一緒に体験しませんか？

「学生が食いつく産業観光」を考えよう in 川崎

1日目 08.08 (Wed)

10:00 JR「川崎駅」改札口 集合
10:30~11:30 事前講習(講演会)
「川崎の産業観光の魅力とは」
講演者:亀山俊之様
11:30~12:30 昼食(持参)
13:30~17:00 フィールドワーク
新の関(株)川崎事務所
→JFE スチール(株)東日本製鉄所
18:00~20:30 工場従業員見学
※工場敷地内への立ち入り
※20:30 品川駅解散(解散予定です)

2日目 08.09 (Thu)

12:30 JR「川崎駅」改札口 集合
13:00~14:30 1日目のまとめ意見交流会
14:30~15:00 休憩
15:00~16:00 発表

川崎市は昔から「モノづくりの町」として
栄え、その文化が深く残っています。そんな工業都市の
川崎市で、モノづくりの大切さとそれに携わる人々の心を
学ぶ「産業観光」を一緒に体験しませんか？

「産業観光」という言葉を聞いたことはあるけれど、実
際に体験したことがない。そんな方は是非に参加くださ
い！大学の教養では学べない何かを得られるはずですよ。

ガイドつき！ 立申し込み方法
https://sites.google.com/site/gakukaren/2st
から必要事項をご記入の上、送付してください。

白 期:平成24年8月8日(水)・9日(木)
場 所:南洲屋とJR「川崎駅」改札口集合
募集人数:40名(※先着順)
募集対象:大学生・大学院生
参加費:会員 1000 円、非会員 1300 円
※8月7日に現金でお支払の願います。
※1日目の夕食のカレー代/代り込み
※7月7日以降のキャンセルの場合金額お支払いただきます。
主 催:日本学生観光連盟
後 援:川崎産業観光部興隆委員会
応募締切:平成24年7月6日(金) 18:00
申し込み方法:オンライン受付(上記参照)
お問い合わせ:gakukaren@yahoo.co.jp

・ 講演会 2012

日本学生観光連盟 主催

講演会

観光業界3企業から講師を招き、
講演会とパネルディスカッションを行います。

テーマ

先輩・若手社員に学ぶ、ここが聞きたい“観光業”!

* 日時:2012年11月24日(土) 13:00~17:00
* 会場:東海大学 代々木キャンパス
(小田急線「代々木上原駅」徒歩約10分)

* プログラム
①.臨時総会
②.学生新事業提案コンテスト参加チームの発表
③.講演会

講演者(予定)
東武鉄道株式会社
成田国際空港株式会社
フォーシーズンズホテル椿山荘 東京
(敬称略)

詳細に関しましては、10月中旬にお知らせいたします。

・ 第 5 期役員募集

日本学生観光連盟

日本学生観光連盟では12月に新執行部役員を選出、現役員からの
引き継ぎを行います。役員として活動をしていく上で大変なこともあり
ますが、一つの団体の運営に携わることは、学生時代の過ごし方として
とても良い経験となります。大学1年生・2年生の皆さん、役員になって
学観連の運営に積極的に参加しませんか？

第五期 執行部役員募集

大学の枠を超えた仲間と一緒に、
何かに打ち込む大学生活にしませんか？

役員募集詳細案内はHPから
日本学生観光連盟 検索

募集期間 11月1日(木)~12月5日(水)18時

立候補者は必要事項を記入の上、執行部までメールにて連絡
代議員会 12月15日(土)18時~ @オリピックセンター
新役員選出 ※立候補する学生は必ず出席すること
総会 3月10日(予定)

正式に役員として承認

募集要項、方法については役員募集詳細案内をご覧ください。
大学1年生・2年生の皆さん、立候補お待ちしております！

(2)公式サイト

昨年 5 月に学観連の公式サイトのリニューアルを行った。(レイアウト等は業者に委託)活動の幅を広げる上で、ホームページの充実には欠かせない。今後は所属会員だけではなく、外部の人にもできるだけ分かりやすい情報発信を心がけたいと考えている。

反省として、当初は 3 月にリニューアルをする予定だったが、業者とのやり取りや前役員との引き継ぎに時間がかかりリニューアル



が遅れてしまった点が挙げられる。役員の引き継ぎの際には業者との連絡を強化することが必要である。またサイトの編集に経験がないため更新に時間がかかってしまった。引き継ぎ用に編集マニュアル本を作成したが、まだまだ不明点が多い。今後も編集マニュアル本を随時更新し、広報内の引き継ぎがスムーズにいくようにしていきたい。

(3)各種広報活動

公式サイト以外にも Twitter・Facebook・Ameba ブログにて情報発信をしている。特に Twitter・Facebook 等の SNS は、会員自身も日常的に利用しているため閲覧率が高く、SNS を通じて学観連に興味を持つ人や入会を希望する学生も多い。今後もサイトの更新頻度を上げ、掲載記事やサイトのデザインの充実を図っていきたい。課題として告知や更新が遅れてしまったという点が挙げられる。各媒体に担当を決め、担当者が更新をおこなうようにしていたが、担当者によって更新のばらつきがあり情報の公開が遅れてしまった。広報内での連携を強化し、情報の公開を一斉にしていきたい。

(4)企画発表会・各種 PR イベント

会員に学観連の活動を知ってもらい、より多くの会員に参加してもらうことを目的とした勧誘チラシを作成し、大学の団体のミーティングや講義にて PR を行った。

昨年 4 月に(株)JTB コーポレートセールス様協力のもと「第一回学観連集会」の開催し学観連の活動を知ってもらうことができた。

課題としては、各大学によって代議員から会員への情報伝達方法にばらつきがあることが挙げられる。次年度は学観連の活動やイベント紹介等を記載した「学観連冊子」の作成や、報告書を充実させることで学観連の活動を知ってもらい、会員の獲得を目指す。

(5)メディア掲載記録

・週刊ホテルレストラン 2012 年 9 月 7 日号 P48 「日本学生観光連盟&HOTERES 共同企画 優秀な学生にホテル業界に入ってもらうには」

・観光経済新聞 2013 年 2 月 16 日発行「第 9 回産学連携オープンセミナー in 東京」の様子

1. 執行部総括

第3期から第4期にかけて、団体の規模は順調に大きくなっている。今年度は代議員会のあり方を見直したことで、会員交流の場を意識的に設けたこと、また幸い意欲的な新入生が多く入ったこと等により、徐々に会員の参加率が上がりつつあるが、それでも執行部として「まず一度参加してもらうこと」の難しさは感じているところだ。

学観連のように、大学の枠を超えた観光系学生の組織は今までにないものであったため、当初は発足したこと自体に話題性があった。そして、実績がなくとも、学生の自主的組織として産学官から期待をかけて頂いていることには今でも変わらない。しかし一方で、今後も継続的に団体を評価いただくためには、第5期・第6期にかけて学観連は次のステップに入らなければならない時期に来ている。設立時の話題性がいつまでも続くものではなく、今後は活動の質・実績が問われるだろう。私たち役員は毎年交代するが、自分たちの任期中のことだけではなく、「今後数年かけてどういう団体にしたいか」という広い視野を受け継いでいかなければならないと感じている。

新しい学問領域である観光学専攻の学生の評価は、観光業界においてすら、他分野の学生に比べて必ずしも優位とは言えない。私たち観光系学生自身が、自らの置かれる状況に自覚をもち、その上で「自分たちには何ができるのか」を考えなければならない。そして、それを実行する受け皿が、この団体であればと思う。

本紙のように年次報告書の形でまとめたのは今期が初めてだが、活動の記録を残し後輩に伝えるだけでなく、このような団体としての課題や問題意識を会員学生・関係者全体に共有し、「一緒にこの団体を立派にしていきたい」「これからも支援したい」と思っていた方が少しでも増えればと思い作成した。

掲載の通り、一つ一つの活動の質向上、組織体制や役員選出方法の見直し等、課題は山積みだ。一学生団体として、当たり前のことがまだまだできていない現状がある。しかし、だからこそ改善する余地が大いにあり、学観連の活動は面白い。

来年度、第5期という節目の年を迎えるにあたり、今一度これらの課題に真剣に向き合い、団体の価値向上に取り組みたい。観光分野における産学官連携の場、観光系学生の価値向上の場として、学観連はこれからも、課外活動だからこそできる“主体的学習の場”を創り上げていく。

第4期 執行部

2. 顧問からの事業評価

- 桜美林大学 ビジネスマネジメント学群 鈴木 勝教授

今年度の一言評価

「拡大しつつある組織の土台を固める一方、過去から引き継いだものに改良を施しつつ、加えて、新たなものに挑戦し特色を出そうと努力した1年ではないか」…そのような環境下にあって、藤野代表を中心としてよく努力し、かなりの成果を残したものと評価したい。

具体的評価

・「組織固めへの努力」

この努力の表れは、役員会 30 数回の実施や合宿などに表現されている。

流動的で拡大する学生組織の運営は、プロである大学経営者でさえもかなり難しい。「組織固め」にプライオリティーを置く藤野代表以下執行部の問題意識は、当を得ていると考える。この1年でかなり固まってきたと評価している。また、組織改編に対する努力も評価したいと思う。

・「過去の引き継ぎの改良」

講演会、産学連携オープンセミナー、交流イベント、フィールドワーク、インターンシップなど、今年度にかなり改良され、また魅力的になり、学観連メンバーの力が発揮できるようになっているのは良い。

・「新たなものに挑戦」

いくつかある中で、サポーターである国際機関 日本アセアンセンター主催の「メコン地域から来日した学生との交流会・意見交換会」は大いなる効果があったようだ。今後の国際イベント開催に対して、学観連メンバーは強い自信を持ったのではないかと考えている。

今後に対して一言期待感

「学観連への期待はさらに強くなっている。広く&深く…」

具体的な期待

・「学観連メンバーの実力を高めよう！」

観光立国を目指す産官学や、サポーター&プロジェクトパートナーの期待感はさらに強いものになるだろう。また、観光系学生以外の一般学生の「観光学レベル」も日増しに高まっている状況にある。これらに対応するために、現在のペースでは物足りなく思っている。自己&メンバー相互の研鑽を期待したい（特に、一般学生による「観光論文コンテスト」入賞などの事例が出ている）。

・「これから観光系学生の出番だ！」

「観光立国ニッポン」の道も決してうまくいっているわけではない。時に「東北地域」の観光復活に、学観連として何か打ち出してもよい時期ではないか。まず手始めに、東北地域の学観連メンバーの勧誘から始めたらどうか。

・「さらに拡大させよう！国際的イベント」

今年度のアセアン諸国の若者との交流で大いなる刺激を受けたようだが、継続してこの種の活動の拡大を期待したい。



(1) 平成 24 年度（学観連第 4 期）の取り組みへの評価

第 4 期の取り組みをひと言で言うならば、「実行力」である。学観連設立に向けて、1 期の役員と準備を始めたころに取り組みたいと思っていたこと、その後の取り組みの中で課題となってきたことなど、学観連は実に多くの宿題を抱えていた。それら多くの問題点を着実に改善し、さらに自分たちで工夫を試みながら、着実に実行してきた 1 年だったと考える。それらは、報告書に記載されている多くの取り組みの成果に見ることが出来る。



新しいイベントの実施や各事業での工夫、ウェブサイトや SNS の活用、告知の工夫や組織体制の再検討と構築など、成し遂げた功績は大変大きい。また代表のリーダーシップや各役員の積極的な関与も大いに評価出来るだろう。

むろん、1 期役員による産みの苦しみ、2 期役員による体制の構築、3 期役員による活動の広がりがあり、4 期の飛躍につながったのである。着実に進化してきたと評価したい。そして、その集大成として、本報告書が作成されたことも大きな成果である。観光系学部学科は、実にさまざまである。1 つ言うとすれば、実務を重んじる風土があるためか、観光系学生はアウトプットに弱い傾向がある。特に、各大学のビジネス志向カリキュラムや指導教員の経歴から、ロジカルな思考力に弱い。その意味では、形式的なフォーマットに基づき、取り組みを整理し、記録し、分析するとともに、今後の方向性を検討する行為は、観光学を学ぶ学生たちにとって、まさに理論と実践の両輪を鍛えることにつながるのである。本報告書を 1 つの雛形として、今後継続的に事業評価を行って欲しい。

(2) 学観連のビジョン・ミッション

大きく飛躍できた 1 年であったが、活動が充実し、活躍の場が広がればまた新たな課題が浮かび上がってくる。世に名だたるエクセレントカンパニーでさえ、多くの課題を抱えており、常に改善と進化を求められているのである。その意味では、学観連はまだまだ基礎作りの段階に過ぎないだろう。観光業界で飛躍してきた企業を見ると、最終的には「組織とは人である」という問題に行き着く。そして、人を集め、育て、組織的に動いていくために多くの労力を要しているのである。また、多種多様な人間をまとめていくのは、明確なビジョン（未来像）とミッション（使命）である。

顧問として、役員達に言い続けてきたことは「観光系学生の社会的評価の向上」である。各学生が自分の将来の夢を達成することは素晴らしい。そのためにも学観連での学びを十二分に生かして欲しい。生かすだけのフィールドも用意されている。しかし、最も期待したいことは、その心の奥底に「観光に強い思いを持った観光学生達こそが、新たな観光の未来を創り出す存在であるのだ」という気概を持ち続けることである。

私達の前に明確な道しるべはない。それはとても難しいことである。だからこそとてもやりがいがあり、おもしろい。本当に観光を学び、考える環境がここにある。

“学ぶ、考える、実践する”



日本学生観光連盟 🔍

<http://gakukanren.m40.coreserver.jp/>

facebook



名 称	日本学生観光連盟 (略称：学観連 英語表記：Japan Student Tourism Association)
設 立	平成 21 年 6 月 20 日
本 部	〒230-8577 神奈川県横浜市鶴見区東寺尾 4-11-1 横浜商科大学 商学部 貿易・観光学科 宍戸学研究室内
代 表	藤野 里帆 (立教大学観光学部 3 年)
主な活動	観光貢献活動 (フィールドワーク、講演会、インターンシップ等の実施)

お問い合わせ：gakukanren@yahoo.co.jp